

# 地方都市に求められる日本語教育

—全南麗水市における市民外国語講座の調査をもとに—

韓有善\*・吉野浩司\*\*

(e-mail : hanyuseon@hanmail.net / yosunokoji@gmail.com)

---

## 目 次

---

はじめに

1. 麗水市の概要と調査内容

1.1. 麗水市の外国人

1.2. 調査方法

2. 地方自治体による外国語教育

2.1. 教育支援課担当者へのインタビュー

2.2. 市民外国語講座

3. 外国語教育と地方史

3.1. 埋もれた国際性の発見

3.2. 現存する史跡を教材に

4. 祭りの活用

結論

---

## はじめに

全羅南道麗水市では、2012年5月からの国際海洋博覧会の開催が予定されている。市民は、この国際的イベントに対し大きな関心を寄せるだけでなく、自らも積極的に参加したいという意欲をいだくようになった。そのことは、麗水市と市民とが一丸となって外国語教育に取り組んでいる様子にも現れている。また、博覧会に特に関心を持っていなかった市民が、麗水市が無料で行っている語学教育に参加者したことで、博覧会に興味を持つようになるという効果も現れている。博覧会期間中に活躍する通訳ガイドやボランティアを、いかにして育成するのかということは、麗水市の教育機関が果たすべき任務であろう。

一般に麗水市はどのようなイメージが持たれているのだろうか。一見すると、のどかで外国との交流が少ない地方都市と思われるのかもしれない。しかし潜在的には、少なからぬ外国人が生活しており、他方においては、市による外国語の教育支援が盛んである。ま

---

\* 又松大学校

\*\* 又松大学校

た国際博覧会という明確な目標が設定されているということは、外国語を学ぶ上で、極めて有利であることはいうまでもないだろう。

ここに、本稿の調査対象として麗水市を選んだ理由がある。一見、外国人との交流が少ないと思われる地域で、どのようにして外国語教育を活性化するのかという問題の解決に、麗水市が格好の素材を提供していると思われるからである。

本稿で具体的に明らかにしたいことは、以下の通りである。現在、一地方都市である麗水市においては、どのような外国語教育、とりわけ日本語教育が実施されているのか。そこには、どのような困難があるのか。そして最後に、そうした困難はどのような方法で解決できるのか、その一案を示しておきたい。

## 1. 麗水市の概要と調査内容

### 1.1. 麗水市の外国人

麗水市といえば、現在、韓国国内でも一地方都市と考えられており、それほど認知度が高いというわけではないだろう。そこでまずは都市の概要を簡単に紹介することから始めたい。韓国南海岸に位置する麗水市は全羅南道に属しており、三方を海で囲まれた、半島都市である。東方の湾を隔てた向かい側には、慶尚南道の南海が隣接している。ソウルからは、汽車で南へ下ること 5 時間半の距離になる。ただし空港があるため、南海岸の他の地域の交通の便と比べた場合に、格段に劣っているとはいえない。

人口は、1998年に麗水市、麗川市、麗川郡が統合する、いわゆる「三麗」統合時には329,722人であった。しかしそれ以後は減少傾向をたどる。2010年現在、麗水市の人口は 293,488人であるから、十数年で約35,000名も減少したことになる。したがって面積約501平方キロの土地に、30万人足らずの人たちが生活する、韓国国内では中規模の都市であるといえよう。

ただ着目すべきは、外国人の数である。国家統計局の統計によると、全羅南道では最も多い数値である<sup>2)</sup>。

表1 麗水市の規模と外国人数

理由として考えられるのは、韓国有数の石油化学コンビナートである

	面積km <sup>2</sup>	総人口	外国人数 (割合)	日本人数
麗水市	501.3	293,488	2,390 (1.22%)	92

国家産業団地で働く外国人労働者や、華陽面などの農村地帯の「多文化家庭 (다문화가정)」などが、外国人の数を引き上げている要因であろう。減り続ける麗水市の人

<sup>2)</sup> 「KOSIS国家統計ポータル」の「人口統計 (2010年)」ならびに「出入国・外国人政策本部 (2009年)」を参照。

口の中で、外国人ならびに国際結婚による新生児の数は、増える傾向にある<sup>3)</sup>。したがって外国人とその家族の数から言えば、全羅南道の中では比較的国際的な都市だといっているのかもしれない。韓国にはあまり目立たないながらも、外国人の多い国際的な都市というのが少なくない。例えば全南の霊岩郡などにも同じことはいえる。外国語教育を考えるには、こうした潜在的には存在している外国人に着目し、これらの人々の人材を活用することは重要である。次章でも触れるように、麗水市でも、そのような試みが為されている。

## 1.2. 調査方法

今回行った調査は、麗水市教育支援課の外国語担当職員1名、および日本語講座担当教師8名の全てを対象とした。調査期間は2011年3月末から4月末にかけてで、その詳細は表2の通りである。

教育支援課へのインタビュー調査では、麗水市が外国語教育を始めたきっかけや、これまでの経緯、現在の問題点などの聞き取りを行った。事前に質問事項を送り、それへの回答を聞きながら、適宜、追加的な質問を行うという形式をとった。また講座担当の日本語講師は8人であるが、そのうち6名にインタビューを行うことができた。インタビューに際しては、事前いくつかのクラスでの授業を観察してもらい、雰囲気をつかんだ上で、講座を担当する難しさや、授業の効果などを聞き取った。

またインタビュー調査をできなかった講師の意見を聞くため、またインタビューを整理するなかで浮かんできた疑問点などを追跡調査するために、アンケート調査を実施した。質問表は講師全体にメールで送付した。質的調査なので、質問に自由形式で答えてもらうという方法を用いた。これらのインタビューとアンケートをあわせると、麗水市の市民講座の日本語担当講師すべてを対象に回答を得たことになる<sup>4)</sup>。

表2 調査の実施内容と引用番号

1. インタビュー (4回実施: 2011年3月24日、4月8日、4月9日、4月25日)					
調査対象	調査日	時間	引用番号	調査場所	備考
教育支援課 (1名)	4月8日	10:30~11:30	CES-I	教育支援課・会議室	
市民講座 (5名)	3月24日	14:00~15:00	CJ-I-1	平生学習館	塾講師

<sup>3)</sup> 麗水市発表の「麗水新生児外国人数」を参照。

<sup>4)</sup> 麗水市の日本語教育の概況を考察するのが本稿の主たる課題であるため、今回は日本語教師を対象を限定して調査した。

	3月24日	14:00～15:00	CJ-I-2	平生学習館	ネイティブ
	4月 8日	11:30～12:00	CJ-I-3	大橋洞住民自治センター	
	4月 9日	11:00～12:00	CJ-I-4	老人福祉センター	文化解説家
	4月 9日	11:00～12:00	CJ-I-5	老人福祉センター	社会福祉士
中高校、大学 校、市民講座 (1名)	4月25日	16:00～17:00	U/VH/C-I-1		※複数の学校 で教えている
2. アンケート (実施期間：2011年4月1日～4月25日)					
調査対象	——	——	引用番号	回答数	
市民講座	——	——	CJ-A-1～CJ-A-7	7件	

以上の調査をもとに、麗水市の市民外国語講座、とりわけ日本語講座の現状と課題を明らかにしたい。本講座は、開講以来、すでに5年以上の実績を積んでいる。その間、どのような施策がなされ、どのような成果が現れたのか。またどのような問題が生じているのか。そのことを明らかにするのが、次章の課題である。

## 2. 地方自治体による外国語教育

### 2.1. 教育支援課担当者へのインタビュー

麗水市では、教育支援課、家庭福祉課の2つの課が、協力して外国語教育を行っている。このうち市民に対する語学全般を教育支援課が担当している。くわえて「多文化家庭」への語学支援については、教育支援課の他に、家庭福祉課の多文化家庭支援センターも担当している。多文化家庭への語学支援の役割分担は、どのようになっているのだろうか。家庭福祉課の方は、いわゆる「結婚移民(결혼이민)」の当事者が、韓国に適應できるための韓国語および韓国の歴史や文化の教育を行っている。一方、教育支援課の仕事としては、結婚移民の人々が、母国語を生かした職業につくための語学教育の支援を行っている。麗水市の場合、中国、ベトナム、フィリピン、そして日本からの女性の結婚移民者が多い。彼女らに対し母国語(ただしフィリピンの場合は英語)の上級講座を受けさせ

せた後、今度は彼女ら自身が母国語を教えたり、海外からの旅行者の通訳ガイドを担当したりする資格を与えるという支援である。インタビューによると、そのような講座を終えた後で、実際に語学教育に携わった結婚移民者もいるということである。特に現在は英語教師の需要が多く、フィリピン人への英語教授法の講義が積極的に進められている。

なお、これらの他に、公的機関で実施されているものとしては、キリスト教団体であるキリスト教女子青年会（YWCA）が、国家産業団地内の企業の支援を受けて、主として労働者を対象に、日本語をふくむさまざまな教育支援を行っている。

本節では、麗水市教育支援課の外国語教育担当職員に対する聞き取り調査（CES-I）をもとに、麗水市の外国語教育の現状と課題を述べる。さらに次節においては、実際の現状を明らかにすべく、市民講座の日本語講師へのアンケートおよびインタビューの結果をまとめる。

麗水市は現在、博覧会に向けて市民がホスト国に見合った、外国語水準を獲得することを目標とする事業を進めている。具体的には、専門的な職種である通訳や観光ガイドなどの育成だけでなく、市内の飲食店やタクシーの運転手や一般市民が、挨拶や簡単な道案内などをできるようになることが目指されている。日本語、英語、中国語の市民外国語講座を無料で開講しているのは、そのためである。教育場所は市内の主な公共施設で、住民センターや図書館、市役所の平生学習館、それから語学塾の教室などを利用している<sup>5)</sup>。特に会社勤めの人を対象とする、夜間の教育は好評だったとのことである。このように麗水市では、外国語に関心のある人は誰でも、身近な場所で学ぶ制度が整っている。

聞き取り調査の限りでは、やはり英語教育に最も力を注いでいるように感じられた<sup>6)</sup>。例えば教育支援課は、自主的に小学校から高校までの外国人英語教師61人を選考・招聘し、市内の各学校のネイティブ講師として派遣している。また独自の英語教育プログラムとして、パソコンを利用した英語講師と生徒による英会話の授業を実践している。これは小学校3年生から中学校3年生までを対象としたもので、先生1人に対し生徒4人が英会話を練習できるようにしている。さらに市内にある全南大学校と共同で、専門的な英語教育を実施し、博覧会で働く通訳ガイドを育てている。この授業に参加する大学生には、大学の単位も与えられることになっている。また英語による観光関係の授業を行うために、30人の受講生を募集し

5) ただし教室の数は不足しがちで、麗水市の教育支援課の問題の1つとなっている（CES-1）。

6) 一般的にもそうした傾向はあるだろう。韓国の語学教育が英語教育への比重が大きくなっていて、日本語を学ぶために語学塾へ通う学生は減少傾向にあるという調査結果もある（国際交流基金2010）。

た。それらにくわえて街中で使える簡単な英会話手帳の作成なども行っている。

以上のような概況をふまえて、次節では、実際に国際博覧会に向けて取り組まれている、市民講座、とりわけ日本語教育の現状について述べていくことにする。だが、その前に1つ疑問に思ったのが、博覧会終了後のことである。これまで続けられてきた市民講座は、果たしていつまで続けられるのだろうか。この質問に対し、教育支援課の担当者から得られた答えは、以下のようなものであった。

国際博覧会の後、麗水市は国際海洋観光とレジャーポーツ（レゾーツ）の都市として、国内外からの人々が集まる場所とならなければならない。またソウルなどの大都市で開かれた国際会議の後などに訪れる観光地として、麗水市をPRすることもこれからの課題ということであった。さらに第4章で述べる地域の祭りの中にも、日本や中国、あるいはヨーロッパ諸国との関係が深いものも少なくない。これらを外国語学習者と協力して、よりいっそう国際色豊かな祭りにしていくことも必要であろう。そのためにも博覧会以降も教育支援課の仕事は続けていかななければならないと担当者は語っていた（CES-1）。事実、市の発表どおり、2006年から2010年までで第1期を終えた観光国際化教育特区の事業は、新たに2011年から2016年までの第2期目に突入している。

人口減少の続く麗水市は、地方都市としての競争力を養い、優秀な人材が流出することを防ぐ必要がある。地方都市が発展するためにも語学教育は続けなければならない。またそれにより市民一人ひとりの自尊心を育てることもなるだろう。というのが、教育支援課が抱えているビジョンであった。こうしたビジョンは実際の現場では、どのように受け止められ、実践されているのであろうか。

## 2.2. 市民外国語講座

前述のように市民外国語講座は、英語、日本語、中国の3ヶ国語が行われている。市内22ヶ所の教室で854人が学んでいる。教室の数だけを見ても、英語が13ヶ所、日本語が8ヶ所、中国語が7ヶ所と、英語の教室が多い。これは世界言語としての英語の需要が多いこともあるが、日本語の場合は、ある程度ならば話せる市民がいることを考慮しての配分らしい。

表3 2011年度市民基礎外国語教育（日本語）

表3は日本語クラスの数と定員を示している。レベルは1（入門）と2（初級）に分かれているが、そ

地区	レベル	人数	教育場所
A	1	35	老人福祉館
	1	24	東京外国語学院
	2	26	東京外国語学院

れほど厳密なクラス編成はなされていない。

日本語の場合、約25人から40人クラスで、基礎会話のテキストを用いて、入門から基礎的な会話ができる

	2	25	おはよう日本語学院
B	1	35	麗西洞住民自治センター
	2	41	平生学習館
C	1	25	光林洞住民自治センター
	2	37	大橋洞住民自治センター

ぐらいまでのクラスがほとんどである。日本語の8教室のうち、ネイティブが教えているのは、表にあるB2クラスである。ここの受講者は41人中、10名程度が日本語能力試験（JLPT）のN1レベルに達している。ほとんどが主婦と退職した男性でしめられているが、中には日本統治時代に日本語を学んだ高齢の受講者もいる。

このB2クラスは、自主的に「麗水市日本語ボランティア会」というクラブを結成している。そのメンバーは市の求めに応じてボランティア活動に参加したり、JLPT試験をめざし互いに教えあったりしている。さらにC2クラスも、主要メンバーで「たのしい日本語クラブ」を結成している。会員の中からは、中学校の放課後授業の先生や、麗水市の日本語教育の講師、文化解説家、放送大学や専門大学の受講生などを輩出している。

このように受講生やクラブの会員の中から、観光課により文化観光解説家に認定され、主だった観光地の案内者として活躍している人も少なくない。外国語ができて、また文化観光解説もできる人に対しては、外国人団体客が麗水を訪れたさいに、案内役を務めることができるシステムがととのいつつある、といえるだろう。これは市民講座の1つの成功例といっている。

市民講座の講師へのアンケートで明らかになったことは、以下のことである。まず良い点としては無料で外国語の授業が受けられることである。また複数の教室に顔を出し、自分の学習の目的やレベルにあった講師や教室を選ぶことも利点の1つであろう。一般に、多くの地方都市は、大都市とは違い、選べるだけの充実した講師陣はそろっていない。そうした現状からすると、麗水市の市民講座は、地方都市としては恵まれた環境にあるといえる。

他方、問題点として、一応のレベル分けはなされているが、実質的な中級レベル以上のクラスが少ないという指摘があった（CJ-A-1）<sup>7)</sup>。これは別の見方からすると、初級にとどまったきり、なかなか上のレベルに上がれないということでもある。これは無料で参加できることから、いくつかのクラスでは、ただ目標も無く漫然と受講している場合もあるのではないだろうか。初級レベルでの停滞状

<sup>7)</sup> 2011年4月より、中級の授業も実施されるようになった。

況を回避するためにも、受講者には、各種資格試験を受けさせるなど、習熟度に関する定期的なモニタリングが必要であろう。しかしながら他方では、中級日本語において、どのような内容を誰が教えるのかという問題が麗水市の市民講座で浮上していることも事実である。これについては、試案としてだが、次章において筆者の実践例を示しておきたい。

以上のように、不十分な点がいくつか数えられるものの、本来、麗水市が行っている日本語教育は、国際博覧会や市内の祭りに、ボランティアとして参加することを1つの目標にしている。アンケートに答えたほとんどの講師が、そのように答えているし、実際に市が行っているさまざまな行事に受講生は参加しているということである（CJ-A-1, 2, 4, 5, 6, 7）。教育特区としての市の外国語支援事業の、さしあたっての目標が国際博覧会でのボランティア育成と通訳案内スタッフの養成ということであれば、これもまた成果の1つとっていいだろう。

本節では、博覧会に向けての外国語ボランティアを育成するという明確な目的が、受講者にも正しく認識され、さらに興味と期待をもって外国語の習得に取り組まれている様子をうかがい知ることができた。講座それ自体は無料で行われているが、ゆくゆくは受講者自らもボランティアとして奉仕活動に参加することになる。もちろん全てのクラスというわけではないが、そのことに誇りをもって外国語を学習していた<sup>8)</sup>。大局的な見方をすると、以上のことは、市と市民が丸となって世界的なイベントの準備にはげむことで生まれてきた、来客をもてなそうとするホスピタリティ精神と、世界に貢献する市民たろうとする精神の表れであるといえるかもしれない。

一方、市にとって市民講座を無料で開講することは、確かに負担になるであろう。しかし長期的に見ると、将来、麗水市の観光案内を行うボランティアとなる人材を養成することになる。その意味では、今行っている事業は、将来の先行投資だと考えることができるだろう。

では、これから先、麗水市の外国語教育の良好な環境を維持し、それをよりいっそう良いものに改善していくには、どのようなことを考えていけばいいのであろうか。次章で問題としたいのは、教育内容の確定が難しく、講師も少ないとされている、中級日本語講座についてである。麗水市の市民講座においては、どのような内容をどのような講師が教えることが望ましいのであろうか。

<sup>8)</sup> 最近の傾向としては、日本語学習の動機が単なる功利性を離れて、日本の社会や文化に対する直接的で、具体的な関心の方へと移っているという報告もある（国際交流基金2010）。

## 3. 外国語教育と地方史

### 3.1. 埋もれた国際性の発見

麗水市の市民講座の例で見られたことは、中級以上のレベルに達した人たちに何を教えるか、そしてそれを誰が教えるのか、という問題であった。先決課題は、何を教えるのかであろう。それが明らかになって、初めて誰が教えるのかということも定まってくるからである。そこで本章および次章では、中級以上の学習者にどのような内容を教えるのか、という問題に的を絞って論じてみたい。

現在、観光都市を目指す地方にとって、市民のホスピタリティが1つの重要な要素となっている。自分が住んでいる町に足を運んでくれた来客をもてなすために、最初に準備しておくべきことは、自分が住んでいる町それ自体をよく知ることであろう。食や地域性など生活に密着したものから、郷土の歴史や文化にいたるまで、旅行者は実に様々な関心と疑問を持つ。さらにその町が、他の地域や国とどのような関係があるのかを知ることも必要であろう。これらの地域を知ることと、日本語をふくむ外国語教育とは、密接につながっている。それはどのように、であろうか。

多くの地方都市がかかえる日本語教育の問題として、身近に日本と日本文化に触れる機会が少ないということがあげられる。しかし実際のところはどうかだろうか。より注意深く観察してみると、思いのほか日本はもちろんのこと国際的にも開かれていたという事実があることに気づかされることも少なくない。麗水市の場合、歴史的にも、また現在の状況にかんがみても、明らかにそういえる。表1にあった外国人、とりわけ日本人の数を見ても、麗水市は地方都市の中では、国際的な地域であるといえた。外国語を教育する際には、教師たちはそうした自らの住む町の国際性について、常に意識しておくことが重要である。また単に意識しておくだけでなく、その事実を、実際に授業を組み立てていくさいに活用していくことは、外国語の学習者の学習意欲にうったえる上でも有効に働くはずである。そのことを前提として、以下では麗水市の国際性というテーマで、実際に日本語教育の授業を組み立てるとするなら、どうなるのか。その可能性を探ってみたい。まずは麗水市のどんなところに、歴史に埋もれた国際性を見出すことができるのだろうか。

船が主要な交通手段であったころ、島や半島にある良好な港は、国内の人のみならず、外国人たちをも受け入れる場所であった。たとえそのことに消極的であったとしても、難破船や外国船の寄港地として受け入れざるをえない位置にある。多くの島を有する半島都市である麗水の場合には、とりわけその事実は良く

あてはまる。そう考えると麗水は、美しいリアス式海岸のある一地方都市という、現在のイメージとは別に、もう1つの違った一面を持っているということになるだろう。今では目立たなくなっているかもしれないが、実はこの街が、これまで国際色豊かな港町として発展してきたという一面である。ここでは簡単に、その歴史的な事実のいくつかをあげておこう。

例えば古代においては、現在、麗水市に属している巨文島が、遣唐使船の寄港地として着目されたことがあった（円仁『入唐求法巡礼行記』）。また近世になると水軍節度使がおかれ、後にこれが李舜臣による全羅左水營へと発展する。そこで豊臣秀吉率いる日本軍と対峙したのは、麗水近海の洋上であった（李舜臣『乱中日記』）。この歴史的な事実については、次節において、日本語教育の実践例として述べることにする。さらに時代を下ると、諸外国との様々な交流があった。西洋人として初めて朝鮮時代の韓国を世界に紹介したオランダ人のハメルが、麗水に滞在し、ここから帰国したという経緯がある。東インド会社書記官であった彼が韓国に漂流した後、捕虜として国内を転々とし、最終的に3年半滞在した麗水から日本へと脱出したのであった（ハメル『朝鮮幽囚記』）。

近代に入ってから、イギリスとロシアの東アジア進出の拠点とされたこともある（ゴンチャロフ『フリゲート艦バルラダ号』）。麗水の沖合いに浮かぶ巨文島には、当時のイギリス兵の墓が現在も残されている。さらに日本統治以前に日本の漁民が麗水の島にわたり、漁場の新規開拓に乗り出すという事例もあった。麗水のイリコの製法など、近代的な水産業は、このときに始まったとされている（中村均1994）。

こうした郷土の歴史的な事跡は、実際の日本語教育の現場では、どのように生かすことができるのだろうか。以下では、その一案を示しておきたい。

### 3.2. 現存する史跡を教材に

本節では、筆者（吉野）が2008年1月から2010年2月までに、初級から中級の受講者を対象に行った、麗水市の市民外国語講座の教育実践についての報告である。実際には、麗水市の紹介および市内にある史跡および観光地を案内するための日本語会話を担当していた。ここでは、麗水市の有名な史跡である鎮南館を使った日本語教育の実践例を提示してみたい。なぜ鎮南館を選んだのかというと、まずこの建物が麗水市の唯一の国宝であり、この地を訪れる観光客が必ず立ち寄る場所だからである。また日本とも関係の深い史跡であることから、日本語学習者も興味深く学ぶことができるという理由も挙げられる。

それでは鎮南館とは、一体どのような建物なのだろうか。これは、さきに触

れた李舜臣が、韓国の水軍を指揮した全羅左水營が置かれていた所である。したがって、この建物は、歴史教育や国と郷土の誇りを高める道德教育のために用いるだけでなく、この建物と関係の深い日本を意識した、語学教育の場としても使うことができるであろう。

しかしながら現在の麗水市民にとって、この建物とそれに関連する史実は、残念ながら、それほど詳しく知られているというわけではない。そこでまずは、鎮南館とそれに関連する知識をレポートにまとめさせることから始めなければならぬだろう。その上で、そのレポートを日本語に翻訳し、紹介できるようになるまで繰り返し練習する。ここまでは教室でのグループ学習でよいだろう。あるていど台本を見ないで解説できるようになったら、今度は、現場実習である。説明する内容にしたがい、建物の周辺を移動しながら案内の練習をすることに留意する。

こうした現場実習には、いくつかの利点が考えられよう。まず説明する物件が実際に目の前にある。そのため、そこで話される言葉は、生きたものとして学習者にとらえられるであろう。木材の色や材質、あるいは触感にいたるまで口に出して説明するということは、たとえ映像を用いたにしろ、教室の授業では得られない経験となるであろう。やさらに日本人に紹介する機会を想定した実践教育であるから、学習者にとって、より熱心な態度とならざるをえない。そして何より、文章の丸暗記よりも、目の前にある事物を説明した方が、覚えるべき文章の記憶力は高まり、また記憶した内容も定着しやすかった。

この事例でいうと、筆者が実践してみて、もっとも困難であったのは、レポート作成から案内の台本作りまでの作業である。レポート作成はグループ学習で試みたのだが、文化財に関する知識や関心の度合いの差、歴史や文化の用語を日本語に置き換えることの難しさ、あるいはグループ内の日本語能力差の問題などが、しばしば作業を滞らせる原因となった。したがって説明しようとする物件についての適切な教科書があれば、学習者の負担はかなりのところ軽減されるであろう。

ただし現場での実習教育において、市民講座の受講生が自らも関与しながら、自分たちの教科書を作り上げていくという作業それ自体は、日本語の学習に主体的に参加しているという意識を持たせることにつながり、きわめて有益な作業であった。その長所は、ぜひとも保持しておく必要がある。そのためにも、たとえ教科書ができあがった後でも、それを自分自身が実際に案内するときの台本として使いやすいものとするために、絶えず学習者の手で、それを書き換えるという作業を欠かすことはできない。

## 4. 祭りの活用

第 3 章では、歴史的な遺跡や史実に見られる国際性を理解し、それを外国語教育にどのように役立てるのかについて論じた。本章では今現在、外国人とのコミュニケーションの機会をいかにして作るのかについて考えてみたい。すでに指摘したように、地方都市は大都市と比べ、異文化に接する事が少ないと言われており、今回のインタビューでも、しばしば聞かれた。これは当然予想されていた回答である。しかし地方都市はそれを理由に、実践的な外国語教育を停滞させてはいけないうらう。地方都市では大都市以上に、少ない機会を可能な限り利用する方法を考えなければならない。麗水市の場合、それには何があるのだろうか。

現実的に考えられるのが、郷土の祭りである。韓国には全国各地に、地域色の強い祭りが数多く存在している。麗水にも、上述のように歴史的に世界の国々と関係があったために、その祭りのいくつかは、国際的な参加者や観光客が見込まれている。特に国際社会と関係のある祭りとしては、麗水市で最も由緒のある「ゴブクソン（亀甲船）祭り」、それから「国際青少年祭り」があげられよう。また海洋リゾート都市を目指していることから「帆船祭り」にも力を入れている。そしてなにより麗水のみならず、韓国全体にとっても重要なのが、2012年5月から3ヶ月間、期間限定で開かれる麗水国際博覧会であろう。これらはどれをとっても、自らが学ぶ外国語を生かす、またとない機会である。以下では、それらを簡単に述べておきたい。

まずは「ゴブクソン（亀甲船）祭り」である。これは先に触れた李舜臣が考案したとされる亀甲船にちなんだ祭りで、すでに50年以上の歴史を持つ、麗水で一番古いお祭りである。学生や市民による仮装行列などもあり、当日は、かなりの賑わいをみせる。

次に「国際帆船祭り」である。現在、海洋レジャースポーツ都市になるべく、麗水市は努力を続けている。歴史上、麗水と交流を持ってきた、その当時の船は、すべて帆船である。麗水のシンボルともいえる亀甲船も、一種の帆船であったといえるだろう。麗水で帆船祭りがはじまったのは、そうした経緯があるからである。祭りの当日は、ロシアや日本から招いた帆船とその船員たちを、間近に見ることができる。祭りの期間中は、街中には日ごろはあまり見かけない、外国人の姿を目にすることができる。

続いては「国際青少年祭り」である。この祭りは、世界中の約700名の子供たちを招待し、会議の場を設けて、国際交流を進めることを目的としている。多文化家庭をはじめ国際化の進む麗水にとっては、これからますます、その重要度が

増していく祭りであろう。麗水市にある中学校、高等学校が中心になって、この祭りに参加している。しかし参加したものの、積極的に外国の子供たちと会話するまでにはいたらなかった、という現実もあるようである。そうならないためにも事前に大会参加者との打ち合わせをしたり、授業の時間を使って質問や会話の準備をしたりするなどの工夫が必要であろう。

これらの祭りは、ただ見に行くだけでなく、ボランティアやスタッフとして、積極的に関与していくことで、生きた外国語を使うことができる。すでに麗水市では、外国語講座の履修生をボランティアとして人材を活用することを視野に入れて、ボランティアのデータベース化事業を進めている。外国語講座の受講生には、祭りやガイド、あるいは文化観光解説家として、毎年活躍の場も開かれているのである。またそれだけではなく、以上見てきたように、麗水市で日本語を学んでいる人たちが、いままで以上に活躍できるような場面は、これからもますます増えてくるであろう。そうした見通しは、地方都市麗水において外国語教育に携わっているものは誰しも、常に心がけておかなければならないことであり、そればかりか学習者に対しては、適切な情報と参加の機会を提供するという重要な役目を担っている。

## 結論

本稿では麗水市の市民外国語講座を例に、地方都市における日本語教育について考えた。その際、同市の市民講座の成果と問題点を明らかにするとともに、その解決策として、筆者自らの実践例を一案として示した。講座の成果としては、博覧会へ向けた語学教育に参加することで、市民がより積極的な姿勢で学習に取り組むことができていることがあげられる。市民は無料でこの講座に参加することができ、また、ゆくゆくはボランティア要員として、市のさまざまな行事や観光案内の仕事に携わる人たちでもある。そのことは、受講生のやる気を維持するとともに、市にとっても有用な人材の確保という点で、大きな利点となっている。これらは麗水市の市民講座の成果といえるだろう。

ただし課題がないとはいえない。それは一定レベルに達した受講生が、さらに能力を高めるプログラムがないことである。中級レベルの教育を行う講師が少なく、また教える内容が不確定であることが、そうした課題を生じさせている。この問題を解決するために、どのような内容の日本語教育を行えばよいのかを提示した。具体的にいうと、地方に埋もれている観光資源を、より国際的な視点から

再発見し、それを日本語教育に活かすという提案である。その講義内容は、初級を終えた受講生が、より身近なところから、日本語を学び直すきっかけを作るとともに、観光案内となる準備を兼ねることにもなる。

以上が本稿で明らかにしたことだが、同時に、主として行政と講師の観点から論じるという本稿の性格上、次の点に論及することができなかった。1つめは市民講座の受講生の意見である。確かに市の担当者と講師から見た受講生への教育効果については知りえたものの、受講生の生の意見を聞くまでにはいたらなかった。さらに2つめは、日本語教育に限定したために、市民外国語講座の全体像を浮かび上がらせることに成功しているわけではない。これらの論点については、今後の課題として残されている。

ともあれ麗水国際海洋博覧会は、2012年5月12日から8月12日までの間に、国内外から800万人の来客者が訪れると予想されている。そのうち55万人の外国人来場者が見込まれている。博覧会の期間中は、各パビリオンはもちろん、市内の12ヶ所に、博覧会および観光に関する案内所が設けられる予定である。その際には、外国語による対応が可能となるように、通訳ガイドが配置されることになるだろう。博覧会においては、麗水市の市民外国語講座の成果が問われ、その最終の総合的な評価が、今後の韓国の地方都市における外国語教育のあり方を考える上での重要な素材を提供するであろう。

## 【参考文献】

- 李舜臣（2000）『乱中日記—壬辰倭乱の記録』北島万次訳注、平凡社（東洋文庫）。
- 円仁（1990）『入唐求法巡礼行記』中央公論社。
- 国際交流基金（2010）「日本語教育国・地域別情報> 2010年度> 韓国」。  
<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/2010/korea.html>
- ゴンチャロフ、I・A、（2008）『ゴンチャロフ日本渡航記』講談社。
- 櫻坂英子編（2007）『韓国における日本語教育』三元社。
- 宣元錫（2009）「動き出した韓国の移民政策」『世界』第797号、239～250ページ。
- 田中博（2002）「旬の海外日本語事情 韓国」『月刊日本語』（アルク）、第15巻第5号（通号 173）、22～23ページ。
- ハメル、H（1976）『朝鮮幽囚記』平凡社。
- 中村均（1994）『韓国巨文島につぼみ村』中央公論社。

### 統計および資料の出所（韓国語）

- KOSIS国家統計ポータル：<http://www.kosis.kr/index/index.jsp>
- 出入国・外国人政策本部：  
<http://www.immigration.go.kr/HP/TIMM/index.do?strOrgGbnCd=104000>
- 麗水市庁：<http://www.yeosu.go.kr/>
- 「2006－11年観光国際教育特区」：<http://www.mke.go.kr/sezone/szhtml/200611.htm>
- 「麗水新生児外国人数」：  
[http://mayor.yeosu.go.kr/home/m/m2\\_01/m2\\_01\\_01/show/46498?page=182&search=&keyword=&cate\\_sel=](http://mayor.yeosu.go.kr/home/m/m2_01/m2_01_01/show/46498?page=182&search=&keyword=&cate_sel=)

## 要 旨

本稿では、麗水市が行っている市民外国語講座、とりわけその日本語教育を調査した。そこではこの講座の成果と問題点を明らかにするとともに、その解決策として、筆者自らの実践例を示した。

市民講座の成果としては、以下のことがあげられよう。博覧会へ向けた語学教育に参加することで、市民がより積極的な姿勢で学習に取り組んでいること。講座は無料で行われているが、受講生は、ボランティアとして市のさまざまな行事や観光案内の仕事に携わる人たちである。受講生のやる気を維持するとともに、市にとっても有用な人員を確保するという点で、これは講座の大きな利点となっていることを確認することができた。

また講座の改善点としては、一定レベルに達した受講生が、さらに能力を高めるためのプログラムがないことがあげられる。中級レベルの教育を行う講師が少なく、また教える内容も不確定であることが、そうした問題を生じさせている。この問題を解決するための本稿での提案は、地方に埋もれている史実、史跡、祭りといった観光資源を、より国際的な視点から再発見すること。そして、それを日本語教育に活かすということである。そうした講座が開かれれば、市民にとって身近ものを、日本語を通して学び直すといういい機会となる。そのことは観光案内者を育成することにもつながり、麗水市と市民にとってこの講座が、よりいっそう有意義なものとなるであろう。

キーワード：市民外国語講座、麗水国際博覧会、中級日本語教育、多文化社会、観光ガイド

투 고 : 2011. 5. 31  
1차 심사 : 2011. 6. 11  
2차 심사 : 2011. 6. 25